

移民社会におけるノスタルジア
—南洋華人の事例を中心に
櫻田 涼子 (SAKURADA Ryoko) *

異郷から故郷を懐かしむこと、あるいは過ぎ去った時代を懐かしむ「ノスタルジア」なる感覚は、今日、様々な地域社会において大衆消費財の中に埋め込まれたイメージとして人びとに提供されている[日高 2014: 54]。例えば、近年の日本では、昭和ノスタルジアをキーワードに様々なメディアコンテンツが消費され続けている[日高 2014]。一方、発表者が長年調査を行っている南洋華人社会(シンガポール・マレーシア)においても過ぎ去った過去を懐かしむ消費活動が加速している。

記憶の連続性(あるいは断絶性)と再構築の局面の検討は、移動する/した人びとである華人とモダニティの問題を考える上で重要な作業である。19世紀後半から20世紀初頭にかけて中国華南からマレー半島に大量移入した中国人人口は、新天地である英領マラヤやシンガポールにおいて〈伝統的価値観〉を維持するに足る集団規模を維持しながら、しかし英国植民地から独立へと至る激変する歴史と近代化の中で出身地とは全く異質な社会変容を経験している。

ここで議論されるコーヒーショップ、コピティアム(*kopitiam*)とは、マレー語でコーヒーを意味する *kopi* と福建語で店を意味する *tiam* からなる語で、コーヒーや紅茶などの嗜好飲料と軽食を供する喫茶店を指す。コピティアムは、マレー半島の街角では見かけない通りはないと言えるほど広く存在する飲食空間である。コピティアムでは砂糖とマーガリンを加えて焙煎した独特な味わいの珈琲豆を濃く淹れた珈琲飲料(多くの場合練乳が入る)や、ココナッツミルクで作るジャム(カヤ *kaya*)を塗ったカヤ・トースト、海南チキンチョップや海南鶏飯、汁麺など幅広い料理を楽しむことが出来る。19世紀後半以降、労働移民としてマレー半島に移り住んだ中国人のうち海南島出身者により営まれたコーヒーを提供する飲食店がコピティアムの元となっているとされ、早朝から深夜まで老若男女が飲食する日常生活の中心的な場所であり、男性たちが政治談議に花を咲かせ交流する日常的な社交の場であるという意味において、華人社会の重要な社会的空間として機能してきた。今日では、この伝統的コピティアムをモチーフとしてチェーン展開を図る近代的コピティアム(i.e. Old Town White Coffee)が都市部を中心に急増している。これらの近代的コピティアムの店内には中国風のテーブルとイス、英領マラヤ時代の白黒写真が飾られ、失われた古き良き時代や多種多様な〈懐かしさ〉が喚起される店内装飾が特徴となっている。

コピティアムあるいは珈琲を飲みパンを食すというマレー半島で広く市民権を獲得している食習慣は、海南島出身者が故郷である海南から持ち込んだとされているが、実際は南洋において様々な要素が混交した結果のハイブリッドな食文化とみなす方が正確であろう。私見では恐らく海南海口市の喫茶文化「老爸茶」の習慣(歩道などに設けられた茶を飲みながら長話をする空間)が南洋にもたらされたことに端を発したものがコピティアムという飲食空間の始まりと思われる。さらに、マレー半島では後発移民であった海南人は、福建人や広東人が主流派を占めていた錫鉱山での就労や商業への参入が叶わなかったため、ニッチを求めて軽食の屋台を始める者が多かったといわれる。またイギリス植民地行政官の料理人として雇用された海南人も少なくなく、マレー半島で現在広く知られるコピティアムの食事や海南食文化はイギリス式食習慣の影響を受けたものと考えられている。そうであるならば、コピティアムを南洋華人の故郷の味を提供する場所とみなすのは事実を正しく反映していないことになる。しかしながら、マレー半島ではコピティアムは懐かしい過去を想起させる場所として近年盛んに脚光を浴びている。

* 育英短期大学・准教授。

一方で、コピティアムなど市井の人びとにとって馴染み深い空間やその経験を共有する語りの集積からナショナルヒストリーを描こうとする動きが近年流行の兆しを見せている。例えば、シンガポール国立図書館が 2011 年より実施する国家的プロジェクト「シンガポール・メモリー・プロジェクト (The Singapore Memory Project: SMP)」はまさに国家がかりの集合的記憶創造プロジェクトである。SMP は、シンガポールの古き良き日々を保存するために 500 万件以上の人びとの記憶／思い出を収集し、ホームページで公開することを目的としている。それらは「学生時代 (My School Days)」、「私たちの地域 (Our Neighbourhoods)」、「懐かしい食べ物 (Food Nostalgia)」などと分類され、一般市民が投稿した個人的な写真や思い出が「シンガポールの集合的記憶」として日々ウェブ空間に集積されている。

一方、マレーシアでは建国 50 周年を記念し、2013 年に「フィフティ×フィフティ・マレーシア (50 × 50 Malaysia)」が開始された。このプロジェクトも SMP 同様、人びとの「物語」を集めることにより〈私たちの歴史〉を再確認しようとするものである。プロジェクト創始者のニキ・チョン (Niki Cheong) は「我々マレーシア人は食べ物に対する愛着に限らず、ママッシュョップ (ムスリムインディアンが経営する軽食店) やコピティアムといった場所で過ごした日々について語ることを大事に思っている。そうであるならば、この経験を他の誰かと共有するプラットフォーム作るべきだと思った」と述べている¹。

マレーシアとシンガポールのナショナルヒストリーを人びとの声から紡ぎ上げようとする昨今の潮流は、多民族集団を架橋するハイブリッドな要素を持つものほど採用されやすい傾向があるように思われる。ムスリムであるマレー系やヒンドゥー教徒であるインド系も暮らす両国では、どの民族集団にとっても〈懐かしい〉と感じられるものが国民文化として認定されるのである。場所に対する極めて個人的な感情をそれぞれが語りあい共有することは、存在しなかったものを可視化し、見過ごされていたものを具体的な社会空間に位置づける実践と成り得る。こうして、多声的な語りが輝ける過去という現実を作りだし、「典型的な人生の物語であり集合的記憶のつづれ織り」を紡ぎだすことが可能となる。現在、マレー半島の華人が懐かしい過去として想起するのは、もはや僑郷華南ではなくなりつつある。彼らにとってかけがえのない過去とは、マレーシアやシンガポール移住後に作り上げられたハイブリッドな彼ら自身の生活、あるいはコピティアムなどの南洋に特有の消費空間になりつつある。

参考文献

日高勝之 (2014) 『昭和ノスタルジアとは何か—記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』世界思想社

¹ The Star、2013年9月2日より。